

話しているうちにバグが見えてくる、ラバーダック・デバッグ（Rubber Duck Debugging）

記事のURL

<https://www.gklibrarykor.com/ja/article/9322/>

PDFレイアウトのプレビュー - 本文の一部のみ

プログラムがおかしな動きをして何時間もコードを見つめた末に、隣の席の同僚に助けを求めたことはありませんか。ところが不思議なことに、「ここでこの値を受け取って、こう渡して……」と説明している途中で、自分で「あ、ここが間違っていました」と答えを見つけることがよくあります。同僚はただうなずいていただけなのに、です。開発者の間では、この現象をあえて活用する方法が昔から伝えられてきました。それが「ラバーダック・デバッグ（Rubber Duck Debugging）」です。ラバーダック・デバッグとは、簡単に言えば「机の上のゴム製のアヒルのおもちゃにコードを一行ずつ声に出して説明しながら問題を見つけ出すデバッグ手法」のことです。聞く側は何も言わなくてかまいません。説明するという過程そのものが、頭の中の思い違いや抜けを浮かび上がらせてくれます。この記事では、ラバーダック・デバッグという名前が生まれた由来から、実際のやり方、説明が問題をあぶり出す仕組み、そして開発を超えて日常で活用するコツまでを順に見ていきます。アヒルに話しかけるとバグが見える理由 目標と実際の条件を言葉にして比べるラバーダック・デバッグの架空の事例。効果を保証するものではなく、修正後には実際の実行とテストが必要です。出典：Harvard CS50x、Stanford CS106B。『達人プログラマー』が残した話 この名前は